

むかし、あるところに、お百姓の爺さまと婆さまがいて、美しい娘がひとりありました。ふたりは、葦毛の馬を一頭飼っていました。

娘は、年頃になると、毎日、厩へ行つて、木戸にもたれて、馬と何かしきりに話をしていました。そのうち、娘は、馬と夫婦になりました。

爺さまは、たいそう腹をたてました。

ある日、爺さまは、馬を厩から引き出して、山の畑につれて行きました。そして、畑の中の大きな桑の木の枝に、馬をつるして、殺してしまいました。爺さまが、馬の皮をはいでいるところへ、娘が走つて来て、それを見て泣きました。

馬の皮は、全部はぎあげられると、娘のところへ飛んで行つて、娘のからだにぐるぐるとまきつきました。そして、娘を抱いたまま、天へあがっていきました。

爺さまと婆さまは、娘のことを思つて、毎日泣き暮らしました。

ある晩のこと、爺さまと婆さまのゆめの中に、娘があらわれていました。

「どうか、泣かないでください。こういう星のもとに生まれたと思つて、わたしのことはあきらめてください。そのかわり、春三月の十六日の夜明けに、土間の白の中を見てください。白の中に、馬の頭の形をした虫が、いっぱいわいています。そうしたら、葦毛を殺した桑の木から葉っぱを取つて来て、その虫を飼ってください。すると、虫が絹糸をこしらえます。それを売つて暮らしてください。それは、蚕という虫で、この世の宝物です」

爺さまと婆さまは、はつとゆめから覚めました。

「ふしぎなゆめもあるものだ」

やがて、三月の十六日になりました。ふたりが早く起きて土間の白の中をのぞいてみると、娘がいったとおり、馬の頭の形をした虫がいっぱいわいていました。そこで、山の畑に行つて、桑の葉を取つて来て、その虫にやりました。虫は、桑の葉をよく食べて、やがてまゆをかけました。爺さまと婆さまは、まゆから絹糸を取つて、それを売つて暮らしました。

これが、蚕の始まりです。馬と娘は、おしらさまという神さまになりました。おしらさまは、馬頭と姫頭の二体あつて、たいせつにまつられています。

村上郁再話